

## 高校・一般の部 最優秀賞

新田 多賀子

私は終戦の数ヶ月前に青梅市で四人兄弟の三人目として防空壕で生まれました。

父は勤勉努力家で母は美容師をしていました。幼い頃から、お客様から戦時中の話を聞く機会が多かったのです。

母は子供を守り逃げまどう毎日、終戦間近には敵機襲来。B29の爆音にも逃げる気力も無く「我が家で死ねればいい」とその場にうずくまっていたそうです。

「戦時中は生と死が紙一重なのですね。」

又、外地で夫が戦死し七人の子を残されたお客さんは、食糧買出しに行き、八高線脱線事故（昭22年）に遭遇しました。死者の所持品まで略奪する人がいた話には驚きました。

それでも唯一の楽しみは真空管ラジオ。夕方には「尋ね人の時間」「街頭録音」「ラジオ歌謡」などまだまだ家族を捜す大勢の人が国内、外地にまでいる事、食糧難、浮浪児のいた事又、縁日に行くと白い衣裳に松葉杖の傷痕軍人の姿は恐い思いがしました。

「もはや戦後ではない」と言われた30年代急に電気器具が溢れだし今に至りました。

私も45年の間、共働きをしてきましたが、自分に負けそうになった時には、あのお客さんの話や、父母の苦勞を忍び乗り切ってきました。今の暮らしが、あたりまえと思わず感謝の毎日を過ごしております。